

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730108

研究課題名(和文)近代日本のアジア主義における思想と運動の連鎖 - 大川周明とその関係者を中心に

研究課題名(英文)The Connection Between Ideas and Movements in Modern Japanese Asianism --- Focusing on Shumei Okawa and Related Persons.

## 研究代表者

中島 岳志 (NAKAJIMA, Takeshi)

北海道大学・大学院法学研究科・准教授

研究者番号：40447040

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：アジア主義については、個別の思想家についての研究は多く存在するものの、その全体像を捉える議論はなかなか見当たらない。この状況を打破し、新たな視座を持つアジア主義研究を提示すべく『アジア主義 その先の近代へ』(潮出版2014)をまとめた。

また、昭和初期にアジア主義を推進した大亜細亜協会を論じるため、その中心人物である下中彌三郎の思想と行動を明らかにする伝記『下中彌三郎 アジア主義から世界連邦運動へ』(平凡社2015)を発表した。大川周明をはじめとする国家主義的革新派は、昭和初期のテロ・クーデター事件に関与したが、その思想的背景を明らかにするために『血盟団事件』(文藝春秋2013)を発表した。

研究成果の概要(英文)：Although there exists a great deal of research on individual thinkers in Asianism, one does not see any discussions which grasp it in its entirety. In order to rectify this and present Asianism research from a new vantage point, I compiled "Asianism" (Ushio Publishing, 2014). Furthermore, in order to discuss the Greater Asia Association (DAIAJIA KYOUKAI) which drove Asianism in the early Showa period, I published a biography ("Yasaburo Shimonaka --- From Asianism to a World Federation Movement") which clarifies the ideas and actions of Yasaburo Shimonaka, who was a central figure thereof.

Nationalist reformists including Shumei Okawa also took part in the terrorist coup d'etat in the early Showa period, and in order to clarify the ideological background thereof I published "KETSUMEIDAN JIKEN (The League of Blood Incident)" (Bungeishunju, 2013).

研究分野：社会科学

キーワード：アジア主義 超国家主義 昭和維新 大川周明 下中彌三郎 血盟団事件 大亜細亜協会 世界連邦運動

## 1. 研究開始当初の背景

21世紀に入り、アメリカの覇権力が低下し、国際政治における中国のプレゼンスが高まりを見せている。習近平政権が成立すると、アジアとの連帯が強調され、「一帯一路」というヴィジョンが打ち出された。

この中国の「新アジア主義」的動向は、周囲のアジア諸国に対する軍事的な膨張主義を内包している。実際、南シナ海における領土問題では強硬な姿勢を貫き、フィリピンやヴェトナムなどの周辺諸国の脅威となっている。日本との間でも尖閣問題が深刻化し、日本の安全保障政策の転換を促すきっかけともなった。

一方、日本においても鳩山政権時代には、盛んに「東アジア共同体論」が唱えられた。日米安保を基軸とした秩序体系から、アジアへのシフトを目指す構想はアメリカからの反発や国内保守派からの反発を招き、短期間のうちに頓挫した。

しかし、日中両国から新時代のアジア主義が模索され始めたことは事実であり、今後の世界のあり方を考察するうえで最重要課題の一つとなっている。このとき戦前期の日本のアジア主義を考察し、その功罪を俯瞰する作業は、極めてアクチュアルな政治課題に直結する。戦前期日本のアジア主義は、アジアとの協調・連帯を掲げながら、やがてアジアへの軍事的膨張主義へと回収され、多大な暴力を生み出すことになった。このアジア主義の顛末を明らかにし、その「躓き」の原因を分析することは、現代アジア政治を考える際に欠かすことのできない研究課題である。

## 2. 研究の目的

近代日本のアジア主義を研究することで、現代アジア政治に対する歴史的視座を獲得する。「アジア的価値」をめぐる思想と運動の連鎖が、いかに日本を一つのハブとして歴史的に展開したのかを追求し、その連鎖の土台にある「青年の煩悶」という内在的要因を明らかにする。特に大川周明とその周辺の人物（猶存社・行地社メンバー）に注目し、その思想構造を明らかにする。さらに、彼らのアジア主義がいかにして昭和維新テロ・クーデターの動向と連動したかを追究し、超国家主義の思想的特徴を明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) アジア主義の全体像を把握するために、明治期から昭和初期に至る通史的考察を進めた。アジア主義の原点には、ウェスタンインパクトによる東アジアの伝統的秩序の崩壊がある。東アジア諸国が西洋列強のアジア進出に直面した時、それぞれいかなる対応を行ったかが重要になるため、19世紀半ばにおける東アジアの動向を研究した。

次に日本のアジア観にとって重要な意味を持つ「征韓論」について研究を進めた。また、自由民権運動の中から玄洋社のようなアジア主義団体が誕生する構造とプロセスを明らかにし、日本のアジア主義が天皇主義や超国家主義と同根の思想動向から誕生した論理を論じた。

頭山満をはじめとする玄洋社グループがアジア主義に目覚めたきっかけは、甲申事変に失敗し、日本に亡命した金玉均との交流にある。大阪事件の首謀者・大井憲太郎や『大東合邦論』を書いた樽井藤吉も、金玉均との関係によってアジア主義に覚醒していった。日本におけるアジア主義の誕生に大きな影響を与えた金玉均と日本人の交流を分析し、そこから構築されたアジア主義の特質を明らかにした。そして、このロジックがのちの「閔妃暗殺」につながることを明示し、その過程で重要な役割を果たした「天佑侠」の意義について論じた。

以上のような初期アジア主義の論理を明らかにすることによって、「連帯」を掲げた思想が「侵略」へと転化していく論理と構造を明らかにした。この思想構造が韓国併合をめぐっていかに展開されていったのかを、内田良平・武田範之と一進会メンバーの交流を通じて考察した。

一方、アジア主義の帝国主義化に批判的見地を持ちつつ、東洋的宗教思想を基礎とする「思想的アジア主義」が興隆していったプロセスを明示した。その代表的事例として、岡倉天心、柳宗悦、南方熊楠、鈴木大拙らを取り上げ、アジア主義という思想潮流の一環として捉える作業を行った。そして、この多一論的アジア主義の持つ思想的可能性を追究し、その論理構造の普遍性を論じた。

しかし、思想的アジア主義は日本の対外的膨張主義の中に吸収され、時に政治的に利用されることとなった。このプロセスで重要な役割を果たしたのが大川周明とその関係者（老壮会→猶存社→行地社）である。

以上のようなアジア主義の全体像を分析し、『アジア主義—その先の近代へ』を執筆するとともに、大川周明や大亜細亜協会関係者のアジア主義に焦点を当て、研究を進めた。アジア主義の通史的研究を進めるにあたっては、国会図書館を中心に資料収集を行った。また、当時の関係図書を古書店より購入し、分析に努めた。

(2) 大川周明をはじめとする革新的国家主義者の思想構造を明らかにするために、本研究では下中彌三郎を取り上げた。

下中の思想は、社会主義的労働論から自由主義教育論、農本主義的アナーキズム、アジア主義、超国家主義、世界連邦主義、非武装中立論、絶対平和主義と、常に変転を繰り返した。そのため従来の研究では、彼の思想は一貫したものとみなされず、転向を繰り返す「エタイの知れぬ怪物」（大宅壮一）と称

されてきた。しかし、本研究で追究したのは下中の一貫性であり、思想構造こそがアジア主義の核心にある課題と直結していると考えた。

下中は膨大な論考を残し、多くの運動・組織を立ち上げたため、資料の収集に多くの労力と時間を費やした。また、出身地である丹波地方（兵庫県）に足を運び、遺族や関係者への聞き取り調査を行った。

#### 4. 研究成果

上記の研究成果として、主に『アジア主義—その先の近代へ』（潮出版社、2014年）と『下中彌三郎—アジア主義から世界連邦運動へ』（平凡社、2015年）を出版した。

『アジア主義』においては、アジア主義の教訓と遺産を総括した。アジア主義の理念には、西洋帝国主義という「霸道」を打倒し、アジア連帯の「王道」を確立するというテーゼがあった。西洋列強の功利主義的な植民地支配を打破し、さらにアジアにおける旧態依然とした封建制も打破して、東洋の本質に基づく王道政治を履行するというのが趣旨だった。

しかし、この「王道」を掲げた連帯は、常に日本の帝国主義という「霸道」とコインの裏表の関係にあった。これは明治初期の征韓論に始まり、朝鮮支配や中国革命への関与をめぐって政治問題化した。

「王道／霸道」問題を考える際には、内田良平の軌跡を論じる必要がある。彼は日清戦争直前に結成された天佑侠への参加によってアジア主義に目覚め、中国革命・日韓合邦に深くコミットした。内田の最大の関心は、ロシアの脅威だった。彼はロシアに潜入し、内部調査によって得られた知見から、日本とロシアが一戦を交える必然性を説いた。彼は、ロシアの南下が日本にとって最大の危機につながると考え、国防のためのアジア連帯を志向した。

彼は封建主義的な王朝支配のもと加速度的に弱体化し、時にロシアへ擦り寄る朝鮮・満蒙に警戒心を抱いた。そして、連帯という名の介入を通じて、日本の意志を反映する新政府樹立を目指した。しかし、その一義的な目的が対ロシアという政略に規定され、国防を優先した戦略を立てたため、行動や発言が帝国主義へと傾斜する傾向があった。この問題は、朝鮮においては李容九との衝突となって現れ、中国においては孫文との対立となって現れた。彼の政略的・心情的アジア主義は、朝鮮・満蒙を日本の勢力下におさめることに集約されたため、必然的に帝国主義化する構造を内包していた。竹内好はこの点を指摘し、内田と幸徳秋水の出会い損ねという問題に言及した。つまり、「王道」の追求が「霸道」へと変遷することに対して、内田が自己批判できていないという問題である。これが第一のポイントである。

第二に、心情的な「抵抗としてのアジア主義」の問題がある。典型的な人物は、宮崎滔天だろう。彼は非侵略的連帯を志向し、「侠」と「狂」によって革命を支えた。彼は金銭や命に固執せず、中国革命派の武装闘争を支えた。そこに功利的な計らいはなく、支配への欲望も希薄だった。そのため、彼は現在の中国でも高く評価され、孫文の親友として称賛されている。朝鮮で起こった三一独立運動にも賛同の声をあげ、日本の帝国主義的支配に対する批判的見地を示した。

滔天の反発は、欧米列強や封建制に対してだけでなく、近代社会を覆う功利主義や物質主義、拝金主義へと向けられた。そして、その批判を行動と生き方によって表現しようとし、孫文らへの友情を貫いた。ここにアジア主義の一つの可能性が存在すると言うことができよう。

しかし、「侠」と「狂」のアジア主義は、功利的資本主義への批判を中核としながら、近代国家の樹立を目指したため、活動の成就が近代的システムを加速させるというアポリアを抱えていた。彼の行動は、近代に対するアンチテーゼでありながら、結果的に近代の構造を強化するという逆説を内在化していた。

滔天の後半生は、浪曲師として生きることに費やされ、セクト的な新興宗教への没入に至った。彼は「その先の近代」のヴィジョンを示すことができず、近代に押しつぶされた悲哀を生きた。その破滅的な歩みは、近代批判としてのロマン主義を喚起するとはいえ、壁の前で立ち往生し、迷走した。

第三に、「思想としてのアジア主義」の問題がある。彼らは多一論的認識による近代の超克を説き、東洋思想の再興を追求した。岡倉天心の「不二一元」論や柳宗悦の「東洋的不二」論などは、アジア主義思想の中核となるもので、今でも大きな可能性を有している。

しかし、彼らの活動は、宮崎滔天ほどの行動力を伴わず、アジアの独立運動への散発的・限定的関与にとどまった。竹内が「滔天と天心の出会い損ね」を指摘したように、心情と思想が一体化する場面は少なく、アジア主義の帝国主義化を覆すまでには至らなかった。

大川周明は「政略としてのアジア主義」「抵抗としてのアジア主義」「思想としてのアジア主義」を体現する思想家・革命家だったが、日本による朝鮮支配への批判を欠き、大陸への支配的進出を擁護した。彼はイスラームが文明を超えて浸透する原理に注目し、天皇を中心に据えた「世界の統一」を目指したが、異民族からの反発は必至だった。天皇主義の拡張は、異民族のトポスを脅かす。その論理は、上からの権力的同一化というプロセスを歩まざるを得ず、敗戦による破綻を余儀なくされた。

石原莞爾は「八紘一宇」の理想を掲げ、世界統一のための最終戦争を構想した。彼はそ

の一過程として満州事変を起こし、「王道楽土」のユートピア実現を目指した。アジア主義者の世界統一論は社会進化論を共有し、クライマックスに向けた直線的時間を前提としている。世界は必然的に統一に向けて進歩し、いずれ近い将来に透明な共同体が現前するという。

世界統一のユートピアを構想したアジア主義者は、理念の二元性に関する認識を決定的に欠いた。カントが指摘するように、理念には「統整的理念」と「構成的理念」の違いがある。前者は「人間にとって実現不可能な高次の理想」で後者は「政治的に実現可能なレベルの理念」である。世界統一を掲げたアジア主義者の誤謬は、「統整的理念」と「構成的理念」の位相の違いを認識せず、両者を一体のものとして捉えた点にあった。この立場は、多一論を単一論へと転化させる。アジア主義の問題の核心は、統整的理念と構成的理念の一体化によるユートピア的社会進化を帝国主義的手段によって実現しようとした点にあった。

『下中彌三郎—アジア主義から世界連邦運動へ』で指摘したポイントも同様である。下中の思想は、一見すると振れ幅が大きい。右派／左派という枠組みを前提とすると、彼は時代に沿って「思想的転向」を繰り返しているように見える。大正デモクラシー期の労働運動や自由教育の指導者が、満州事変以降は八紘一宇の理想を鼓舞し、戦後は非武装中立に基づく絶対平和主義を掲げた。その主張を表面的に辿ると、移り気の激しい無節操な人物像が浮かび上がってくる。

しかし、彼の思想には一貫した揺るぎない理想が流れている。それは人類統一への欲望であり、純粹で神秘的な世界の実現だった。ユートピア的楽土の追求は、生涯を通じて継続している。世界がクライマックスに到達し、人類が苦悩から解放されることを確信している。その具体的な姿は、時に児童の村小学校や、農村自治、アジア主義、八紘一宇、世界連邦と変転した。彼が時代の中で飛びついた構想やモデルは次々に変化したが、希求する理想は一貫していた。

『婦女新聞』で活躍した頃には、良妻賢母論を展開すると共に子供至上論を掲げた。彼は子供を「地上の神」と見なし、その無邪気な姿に理想を見出した。下中にとって子供は世界と溶け合った存在だった。子供の世界には貧富の差も関係なく、階級の上りもなかった。すべてが愛に充ち溢れていると思われた。

下中は愛を至上の価値と捉え、家庭を「地上の楽園」と見なした。夫婦は自然の愛によって結ばなければならないため、見合い結婚は否定され、恋愛結婚が賞賛された。愛によって結ばれた夫婦は、純真な子供を産み、「小さなユートピア」を築く。妻は穢れた社会から距離を取り、家庭に理想郷をつくり上げる。これを世界に拡大すればよい。世界を愛で包めばよい。下中はそう考えた。

この考え方は、一君万民の国体と連続していた。天皇という超越的存在を認めれば、すべての人間は一般化され平等化される。天皇主義に基づく「神ながら信仰」によって、人類に清純な平等社会がもたらされる。幼い頃から貧困に苦しんだ下中にとって、天皇は変革のシンボルだった。

この発想が、腐敗した社会への改造運動へとつながった。彼の敵は、平等社会の理想を阻害するブルジョア資本家や政党政治家、欧米列強だった。功利主義的な近代的文明人は純朴な民衆と対象化され、打倒の対象とされた。

下中における革新運動は、日本国体への回帰と共にあった。日本原理に組み込まれた「日本民族としての純真」を発揮することこそ、社会的害悪を除去し、人類の進歩に貢献すると考えられた。そのため、一貫した理想は一君万民コミュニンの実現に集約された。天皇のもと人類は一つになり、格差や差別は根本的に克服される。貧困は除去され、すべてが有機的につながる。全人類が余すところなく希望に包まれる世界が実現する。彼はその担い手を教育者や労働運動家に見出し、自らもその牽引役として啓蒙活動に邁進した。

下中は相互扶助コミュニンを具体化するために、池袋児童の村小学校を創設した。彼の「教育ユートピア」構想では、教師も児童もその家族も共に働きながら学ぶことが理想とされた。教師と生徒の区別は存在せず、教育科目や時間割にも拘束されない。クラスも実質的に設けない。教室も存在しない。それは教育の根本的解体であり、生活実践の至上化だった。

1930年代に入ると、国家主義への警戒心が取り払われ、強硬な日本主義イデオロギーがむき出しになった。彼は天皇による「無私の独裁」を説き、国家の「純粹支配」を礼賛した。「万世一系」の天皇政治は「純粹無雜」であり、「国家即全国民」の日本は予め救済されているとされた。

下中を見ると、日本では天皇を中心の一つの強固な生命的結合が作られている。個は全体のために貢献し、生の意味を獲得する。そこに疎外は存在しない。自己は世界と透明に接続し、神のまにまに生きる。一切の断絶が存在しない。孤独も存在しない。下中の理想は、全体主義の魅力へと急速に吸引されていた。

彼は、純粹な国体への解釈を加える者に対して、全力で攻撃を加えた。特に美濃部達吉の天皇機関説へのバッシングは激しく、「国体悖虐の兇悪思想」の「打破」と「如斯乱臣賊子的異端学説」の「絶滅」を訴えた。

下中にとって日本は神に導かれた神聖国家であり、日本は世界皇化を実現する責務を負っていた。彼のアジア主義は、アジアの皇国化を目標とし、八紘一宇を実現するプロセスの中に位置付けられた。そして、その勢力醸成のために、軍人によるラディカルな現状

打破を期待した。

日本の軍事力によるユートピア実現の夢は、大東亜戦争の敗北によって打ち砕かれた。しかし、下中の夢は続いた。彼は平和憲法の理念に絶対平和主義の理想を見出し、国連を世界連邦へと昇華することで「一つの世界」を実現しようと考えた。この構想の根底には、八紘一宇の理想が疼いていた。彼は戦後も「神ながら信仰」に基づく国体論を手放さなかった。その絶対平和論は、「世界の皇化」という理想に「世界連邦」をラッピングしたものだ。平和憲法は「神ながら信仰」の具現と捉えられ、天皇主義へと回収された。

下中は漸進的な改革を嫌い、急進的な変化を求めた。彼の構想は、常に純粹なるものへの統一へと収斂した。そして、その理想の実現可能性を信じて疑わなかった。ここに彼のアジア主義が陥った大きな問題が存在する。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 59 件)

1. 中島岳志「石原莞爾 戦場から妻への恋文」、文藝春秋 92 巻 11 号、P.320-327、2014、査読無
2. 中島岳志「煩悶と超国家 (7) —大川周明と国家改造運動」、ちくま 504 号、P.36-39、2013、査読無
3. 中島岳志「領土とナショナリズム」、朝日新聞 2012 年 9 月 12 日朝刊、P.15-15、2012、査読無

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 20 件)

1. 中島岳志「超国家主義と日蓮思想—最後の高山樗牛」、上杉清文・末木文美士【編】『シリーズ日蓮<5>現代世界と日蓮』(春秋社)、P.149-172、2015
2. 中島岳志『下中彌三郎—アジア主義から世界連邦運動へ』(平凡社)、P.1-383、2015
3. 中島岳志『アジア主義—その先の近代へ』(潮出版社)、P.1-455、2014
4. 中島岳志「アジアの脱植民地化と帝国日本—タゴール・ブームと野口米次郎」、荻部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士【編集委員】『岩波講座・日本の思想 第三巻 内と外—対外観と自己像の形成—』(岩波書店)、P.175-216、2014
5. 中島岳志「「東洋の理想」の行方—大川周明と井筒俊彦」、安藤礼二・若松英輔【責任編集】『井筒俊彦—言語の根源と哲学の発生』(河出書房新社)、P.102-113、2014
6. 中島岳志『岩波茂雄—リベラル・ナショナリストの肖像』(岩波書店)、P.1-278、2013
7. 中島岳志『血盟団事件』(文藝春秋)、

P.1-400、2013

8. 中島岳志「京都学派の遺産—鈴木成高における世界史の哲学と戦後保守」、酒井哲哉【編】『岩波講座・日本の外交 第3巻 外交思想』(岩波書店)、P.175-199、2013
9. 中島岳志「パル判事」、田中利幸【編著・監訳】ティム・マコーマック・ゲリー・シンプソン【編著】『再論 東京裁判—何を裁き、何を裁かなかったのか』(大月書店)、P.208-238、2013
10. 中島岳志「若き大川周明—煩悶から復興アジアへ」、松浦正孝【編】『アジア主義は何を語るのか—記憶・権力・価値』(ミネルヴァ書房)、P.476-496、2013

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等 なし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

中島 岳志 (NAKAJIMA, Takeshi)  
北海道大学・大学院法学研究科・准教授  
研究者番号：40447040

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし